

スリランカでの生活も残り少なくなってきた。12月3日に帰国することになり、早めに航空券の手配は済ませた。それまでに約1カ月はある。残りの日々をあわただしく動き回りたくないのので、早めに帰国準備を始めた。

まずしなければならないこととして、荷物の整理であるが、スリランカ・リサーチに必要な書籍や雑誌類がたくさんある。雑誌等は多少処分したが、書籍はどうするか。トランクに入れて持ち帰るのは重量オーバーで恐らく超過金がかかり必要になると思われるので、郵便で送ることにした。ケラニヤ大学の近くの郵便局に行き、日本へ段ボール箱に詰めた本を送れるかどうか尋ねたところ、大丈夫とのことなので郵便で送ることにした。

翌日段ボールを探した上で、本を大きなバッグに入れて、郵便局へ出かけた。書類を書いたり、本をダンボールに詰めたりして、何だかんだで1時間以上はかかってしまったが、何とか手続きが終了した。重さは12kgを超えてしまい、料金は6000ルピーであった。船便なので日本までは約2か月かかるそうだ。書籍を送ることができて安心したせいか、数日後書店に行き、また大量の本を購入してしまった。今度は写真集とか旅行関係

の本が主体で、これまたかなりかさばるようなので、これらも送ることとし、再度郵便局に出かけ、前回同様に船便で送った。今度は前回送らなかったものも多少あるので、それらと共に計算してもらおうと10kgほどで、約5000ルピーとなった。前回のものと合わせると、11000ルピーとなり、日本円だと9000円くらいの金額だと思う。

もうこれで一安心である。あとは1か月あわてず、ゆっくり、過ごすこととした。それまでの自由な時間を利用してまず南西部の方へ小旅行を試みたいと思った。旅行会社で働いている友人に車を手配してもらい、彼の運転で3泊4日の旅に出かけた。行先はルフナ紅茶の生産地をはじめとして、ゴール、バールワラ、カルタラを回った。ルフナ紅茶の生産地を除いて、それ以外のところはこれまで訪れたことがあったが、あまり時間をかけて見て回っていなかったのので、今回は時間をかけて見て回った。

これまでスリランカの主な紅茶生産地は訪れてきたが、ルフナ紅茶の生産地だけは訪れたことはなかった。しかも、今までどの辺にあるのかあまりよく分からず、スリランカの人に聞いてもはっきりしなかったが、住んでいる家の大家さんが確かこの紅茶生産地の近くの出身だということ思い出し、彼に連絡を取って詳しく教えてもらった。彼によるとルフナ紅茶の産地はユネスコの世界自然遺産に指定されているシンハラージャの近くにあるとのことだった。しかも幸いなことに、彼の親類が紅茶工場を持っているので、その人を紹介してくれることと別な親類の家に泊まれるように手配してくれた。

ルフナ紅茶は他のスリランカ紅茶の生産地と比べると、標高600メートル程度のかかなり低地にあり、1500メートルを越える他の生産地とは大分異なる。当然味も香りも違う。ルフナ紅茶は濃厚な味わいがする紅茶で、ミルクティーにすると合う



ケチマラ・モスク ベールワラのスリランカ最古のモスクの一つ



天皇誕生日祝賀パーティの様子

かもしれない。気に入り、1kgも購入してしまった。

ゴールは何度も来ているところなので今回はあまり見て回ることはしなかった。ここでは1泊し、翌日はベールワラへ移動した。ベールワラには大きなモスクが2つある。何せここはスリランカ・モスLEM発生の地なので、モスLEM人が多く住み、他の町とは雰囲気を変にする。カルタラではRichmond Castle(リッチモンド・キャスル)を見学した。ここはある金持ちのスリランカ人が1896年に建てた邸宅で、ほとんど観光コースにはなっていない。こんな風にしてのんびり友人と旅行をした。

2週間ほどして知人から11月30日に「天皇誕生日祝賀パーティ」がコロンボであるので、出席しませんか、との連絡があった。帰国寸前なので、どうしようか迷っていたが、再度勧められたので、出席することにした。当日はSri Lanka-Japan Friendship Association(スリランカ日本友好協会)の主催で、コロンボ・シナモン・レイクサイド・ホテルにて開催された。主だったスリランカ在住日本人と日本との関係があるスリランカ人が200人位参加されて盛大なものであった。在スリランカ日本大使ほほのぶひと粗信仁氏ご夫妻も招かれていて、私も話をする機会を得た。

スリランカに住む日本人は300人程度で、多くはない。その上、最近では中国人や韓国人に押さ



祝賀パーティで粗大使ご夫妻と共に(右から2人目が筆者)

れて日本人の存在はあまり目立たず、一方中国人は政府の後押しで高速道路の建設や進出企業の労働者としてかなり目に付く。韓国人も同様である。私が所属するケラニヤ大学にも中国人の姿が多い。中国政府は世界中に孔子学院を作り、中国語と中国文化の普及に努めているが、孔子学院はケラニヤ大学にもあり、多くのスリランカ人が中国語を学んでいる。その上、何十台という最新式のパソコンも寄付するなど、国ぐるみで進出しているといった具合である。

このようにして日本への帰国を真近にしてのあわただしい日々を過ごしていた。学生たちとの送別会や友人たちとの食事、来訪者との対応など人と会うことが急に増えて、最後の1週間は何かと忙しくなってしまった。

しかし、どうにかすべての準備を終え、12月3日の出発に向けて帰国前日は空港近くのホテルに泊まった。出発当日は朝7時15分発のフライトのためホテルに泊まったが、後は香港経由で帰るだけであった。香港には1週間滞在した。

長いと言えば長かった1年間だが、逆に短いと言えば短かった1年間、ともかくも無事に終えることができた。もう1年間どうかという話もあったが、私には1年間でもう十分であった。帰国すると、あまりにも寒い天候にただ驚くばかりであった。